

『ある奴隷少女に起こった出来事』

今回は、ハリエット・アン・ジェイコブズ著、堀越ゆき 訳『ある奴隷少女に起こった出来事』（新潮文庫）を紹介したいと思います。

本書は、実在するアフリカ系アメリカ人による自伝です。冒頭の「著者による序文」において、「読者よ、わたしが語るこの物語は小説ではないことを、はっきりと言明いたします。」と記しているように、「ある奴隷少女」に起こった過酷な現実が綴られています。

著者のジェイコブズが生まれたのは、1813年。場所はアメリカ合衆国東南部のノースカロライナ州です。当時、ノースカロライナ州は南部の奴隷州でした。奴隷の母親から生まれた子は、父親が誰であれ「その子は「母の身分に付帯する条件を引き継ぐ」ことになっていた」ため、奴隷として生まれました。19世紀の初めです。アメリカは領土を広げ、西部への進出を本格化させ始めていました。ヨーロッパはナポレオン戦争による混乱期で、さしもの全盛を誇ったナポレオンも敗色が濃くなりはじめていた頃、我が国は江戸時代末期の化政文化の時代。200年以上前ですから、ずいぶん昔の話なのですが、読み進むうちに、すぐそこで起こっている出来事を目撃しているような気持ちになりました。著者の押し殺した息づかいが迫ってくるようでした。

この本が最初に刊行されたのは、1861年です。この年号、ピンときませんか？ アメリカの南北戦争が勃発した年です。アメリカでは、南部と北部で地域的特色や産業構造が異なることや、連邦制の在り方に対する相違などから、南北には対立がありました。これに、奴隷制問題が加わり、さらに西部に新たにできる州の帰属をめぐり、その対立は、ぬきさしならぬものになっていたのです。

刊行されたときは、作中人物が存命だったため、「リンダ・ブレント」というペンネームで執筆され、一部の地名は隠し、人物にも偽名が使われました。一般的には、白人著者によるフィクションとみなされて読まれたとのこと。奴隷にこのような作品が書けるはずがないという先入観、偏見もあったのでしょう。奴隷解放運動の集会などで細々と売られたものの、やがて忘れ去られ、関係者の死とともに著者・ジェイコブズとのつながりも分からなくなっていったのです。

実話であると証明される転機となったのは、1987年のことで、黒人奴隷史の研究者イエリン教授が、ジェイコブズ直筆の手紙を発見し、そこに書かれている内容や文体、そして独特な表現方法が、かつて読んだことのある“小説”と酷似していることに気付いたことによるものでした。

この作品の大きな特徴は、「女性」の奴隷の視点から書かれているということにあると思います。私が高校生の時（ずいぶん昔、昭和52年頃…）、『ルーツ』という小説がベストセラーになりました。著者のアレックス・ヘイリーが、彼の一族の歴史をたどった小説で、数代前の先祖が西アフリカで奴隷狩りに捕らえられてから以降、その子孫たちが奴隷としてたどった苦難の歴史が描かれていました。夢中で読んだ記憶がありますが、今にして思うと、この小説の視点は「男性」からのものであったという気がします。後でまた読み返してみたいとは思いますが、年頃の奴隷少女にはどのような厳しい運命が待ち受けていたのかということについての印象は、「ある奴隷少女」の方が強烈でした。奴隷としての試練に、「女性」の奴隷としての試練が加わり、愛する子供と無残に引き裂かれることまで加わっていくのです。所有者の思いのままになる奴隷の少女には、どんな残酷な人生が強えられることになるのか、想像したことがありませんでした。

「わたしが経験し、この目で見たことから、わたしはこう証言できる。奴隷制は、黒人だけではなく、白人にとっても災いなのだ。それは白人の父親を残酷で好色にし、その息子を乱暴でみだらにし、それは娘を汚染し、妻をみじめにする。黒人に関しては、彼らの極度の苦しみ、人格破壊の深さを表現するには、わたしのペンの力は弱すぎる。しかし、この「邪」な制度に起因し、蔓延する道徳の破壊に気づいている奴隷所有者はほとんどいない。葉枯れ病にかかった綿花の話はするが — 我が子の心を枯らすものについては話すことはない。」

「奴隷の少女である限り、人間のかたちをした悪魔のような大人から加えられる辱め、暴力、死から、わたしたちを守ってくれる法律など、どこにもなかった。」

社会の制度等には、その中で私たちが守られるという側面があります。しかし、制度等の仕組みの意図しないところで、本来であれば抑制されているはずの欲望のようなものの一部が、守られた中において肥大化し、増殖しかねない面があることを忘れないでほしいと、作者は訴えているようでした。私たちには、強い面と弱い面があります。誰しもが、主人公のリンダのように愛情深く、強く、とてつもなく厳しいけれども尊厳に満ちた生き方を選択できるとは限りません。弱いところを突かれ、残虐性や醜さがあらわになってしまうことがあるのです。過去の歴史を学ぶと、そうしたことの一端に触れることがありますし、かたちを変えて現代においても似たようなことを垣間見ることがある、そんなことを感じさせてくれた自伝でした。